

諏訪小だより

令和5年6月30日
7月号
多摩市立諏訪小学校
校長 齋藤 幸之介

子供たちがみんなで力を発揮することを願って —多摩市立諏訪中学校の運動会から学んだこと—

過日行いました学校公開には多数御参観くださいまして誠にありがとうございました。諸状況も変化をしましたので、できるだけ多くの方に御来校をいただくべく工夫をしてみました。不十分な点もあり、皆様にはいくつかの御意見も頂戴しております。今後改善できる点については行ってまいりたいと思います。どうぞよろしくごお願い申し上げます。

思いや願いを叶えるために

—諏訪中学校運動会で出会った素敵な姿—

さて、土曜日参観となった6月6日、多摩市立諏訪中学校では運動会が行われました。ある卒業生が「運試し」と言いながら、私にジャンケンを挑んできました。勝った子は一言「今日はいいことがある気がする」。

しばらくして諏訪第四公園の横を通ったとき、数名の中学生がバトンパスをしていました。午後のプログラムにあったリレーの最終チェックをしていたのでしよう。

諏訪中学校の運動会が始まる前には、このような場面がありました。強い思いや願いを抱きながら一瞬とも思える本番を迎えようとするその姿に心を打たれました。

競技の直前には、円陣を組む場面が見られました。気持ちを高めていこうとする若者の姿は力強く、また純粋でもありました。

「円陣」から、私は「傘連判状」を思い出しました。

傘連判状

かつて6年生の社会科の教科書にも掲載されていた傘連判状は、武士の契約状や農民の訴えなどの形式の一つで、「からかさを開いたように、円形をえがき、それを中心に放射状に署名をつらねる」ものだそうです。百姓一揆などを行う際に首謀者を誰だか分からなくするため、という意味もあるそうですが、参加者の責任の平等さを示すためでもあった、ともされます(参考:「キッズネット」(学習研究社))。改めて、円陣を組んだ諏訪中学校の生徒さんの「みんなで勝ちたい」という思いを確認できたいがしました。

「中心から等距離」にある意味

すでにご存じのように、中心から等距離なる無数の点が円周となって円が描かれます。傘連判状や円陣の等しい距離に責任の平等さを込めたことは想像できるところです。

いきなり諏訪中学校の生徒さんのようにはいかないでしょう。個人のめあてをもつことに注力しなければならぬ時期もあれば、ギャングエイジと言い、自分もった価値観に合う仲間だけとの関わりを好む場合もあります。多くの仲間、チーム全体が同じ目標に向かい、互いを励ましながら取り組むのは難しいものです。

しかし、一人一人に適した学習が大切であることが叫ばれる一方で、「協働的な学び」といい、友達と関わりながら、「他者を価値ある存在として尊重する」学習も求められています。これは今に始まったことではありませんが、小学校では小学校に適した関わり方を目指し、子供たちがみんなで力を発揮できる教育活動を平素より行っていこう、と改めて確認をしました。

人間の起源であると言われるゴリラがケンカをすると、他のゴリラが背中を腰に手を触れ、そして顔を覗き込む、するとケンカをしていたゴリラはその後冷静さを取り戻すのだそうです。ここにあるのは「許容」と「共存」、今、改めてなるほど、と個人的に想起するのですが、皆さんはいかがお考えになるでしょうか。

昨年度当初、私はウクライナ情勢を的確に話し合う諏訪中学校の生徒さんの姿を紹介しました。そして、今回の運動会での素敵な姿をお伝えした次第です。本校の多くの子供たちが進学していく諏訪中学校での活躍の様子をよき目標と位置付け、それぞれの学年で何ができるかを考えようとするよい機会を頂戴しました。

末筆になりますが、相楽敏栄校長先生をはじめとする諏訪中学校の教職員の皆様並びに生徒さんに深く感謝をいたします。

(参考) 「サル化」する人間社会

山極寿一 2014年 集英社